

澤田英史さんの思い出

松本 邦夫

澤田さんが亡くなられた。同い年の者として信じられぬ思いである。

澤田さんとは、25年以上前に、神戸大学の浜本先生の研究室で確か2年間席を同じうさせていただいた。私が研究生で澤田さんは院生だったと思う。

浜本先生のゼミで国語教育の勉強をさせていただき、順にレポートを発表する時に、澤田さんは最初からとても緻密で優れたレポートを発表されていた印象がある。浜本ゼミに來られたときから、自己の研究テーマをすでにしっかりと持ち、それについての考察を積み上げておられたのだろう。

私は、現役の教員としてのあり方に物足りなさを感じていたところに、たまたま市の制度として研究生派遣事業があり、先生のご厚意で浜本ゼミにお世話になることになったわけで、国語科教員としてのキャリアはそれなりにあったものの、学問としての国語教育については、あまり自

覚的に考えたことのない研究生であった。

いつも大部のレポートをもとに理路整然と発表される澤田さんに圧倒される思いであったことを覚えている。また両輪の会でも何度もお教えいただいた記憶がある。それらは私がその後、兵庫教育大で国語教育の研究を志すことになる大きな動機の一つであった。

兵教大では諸般の事情により、平安文学の研究をすることになり、修了後にはあまりおつきあいがなくなるのであるが、私の所属している合唱団の演奏会のチケットをお送りすると聴きに来てくださったたり、私の娘が県立芦屋高校で国語をお教えいただいたりという関わりが続いた。娘が笹子トンネル天井板崩落事故により逝去し、賀状を遠慮させていただいたこともあって、澤田さんのご逝去を存じ上げなかったことが悔やまれる。

娘の事故の経緯を短歌に詠んで残すという営為の中で、改めて短歌形式の持つ伝統の奥深さを感じている。澤田さんには短歌のことをもっとおうかがいしたかったという思いである。

澤田さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。